

◆【御船印めぐりの旅】 — 佐渡汽船株式会社 —

「ときわ丸」に乗船して 佐渡金山と尖閣湾を訪ねる②

ときわ丸は2014年に、新潟港～両津港の航路に就航したカーフェリーで、船名は永久不変を表す「常磐」と佐渡の象徴である「朱鷺」、和らぎを示す「和」をかけ、穏やかな風の洋上を羽ばたくトキをイメージして「ときわ丸」と命名された。

「ときわ丸」は最大旅客定員が1500人で、総トン数が5380トン。全長125メートル、最大幅21・8メートル。展望ラウンジ、ブリッジ（操舵室）、2等椅子席、キッズルームなどが新設されたほか、イベントプラザも充実している。

この「ときわ丸」に乗船し、佐渡島の佐渡金山に向かった

佐 渡 金 山

海を左に見ながら少し走り、山手に入るとすぐに史跡佐渡金山の入口に着いた。島には50以上の鉱山が確認されている。その中でも現在史跡佐渡金山として公開されている、相川金銀山は世界でも有数の金産出量を誇った。江戸時代に発見され、平成元（1989）年に閉山されるまで、約78トンの金が採掘された。

かつて鉱石の運搬坑道だった道遊坑に入る。ひんやりした空気にはっと目が覚める。坑内は年間を通じて10度ほどで、酒の醸造も行われていた。現在も日本酒や焼酎が貯蔵されている。

コツコツと響く自分の足音を聞きながら歩く。道遊坑から出て坂を上っていくと、山にぽっかりと穴が開いていて驚く。この道遊の割戸は相川金銀山の主要な鉱脈であった道遊脈を採掘した跡で、国定の史跡。しゃがんでしばらく見上げる。その穴の大きさと深さは、とても人の力で開けられたものとは思えない。

割戸の迫力に圧倒されたところで、今度は江戸時代初期から開発された宗太夫坑へ入る。江戸時代の金採掘や測量などの様子が再現されている。人が這ってやっと通れるほどの穴もあり、見ているだけで、金山で働いた人々の苦勞が伝わってくる。

尖 閣 湾

続いて、佐渡の名勝の一つである尖閣湾に向かった。尖閣湾は波の浸食と土地の隆起でできた海岸段丘が特徴的な景勝地。昭和初期にノルウェーのリアス式海岸になぞらえて名付けられた。

駐車場から少し歩くと、すぐに独特の海岸線が見えた。まっすぐに切り立った崖には細かい凹凸が刻まれ、一つ一つが彫刻のように見える。その彫刻が、青や緑にきらめく海に浮かぶ。そのうちの一つ揚島に造られた展望所から下を見てみると、日本海の波が奇岩に当たってしぶきをあげる。その度に轟音が響き迫力を増す。

しばらく波しぶきに耳を傾けたところで、展望所のそばを散策する。揚島から橋を渡ると灯台がある。この佐渡大埼灯台は佐渡沖合を航行する船舶や漁船の安全を確保するため、昭和39（1964）年に建てられた。高さはおよそ10メートルと高くはないが、白い灯台が尖閣湾の岩と海の中で映える。

金山や能舞台など歴史上重要な史跡に、独特の地形や植物など自然があふれる佐渡島。これから紅葉が見ごろになる他、冬に向けて日本海の海の幸も旬を迎える。ぜひ休暇中にゆっくり時間をとって行ってほしい。

御 船 印

一般社団法人日本旅客船協会の公認事業である「御船印めぐりプロジェクト」では、参加会社の船や航路ごとに発行するさまざまな御船印を集めることができる。

御船印とは、神社仏閣めぐりで集められる御朱印の船バージョンで、日本各地の船をめぐる船旅の楽しみをさらに盛り上げるため、プロジェクトに参加する船会社のオリジナルの御船印帳・御船印紙を購入し、旅客船や観光船などに乗船した際、船旅の思い出を彩る記念の押印（スタンプ）をいただくもの

「海員だより」